

古典の日フォーラム2014

日時：2014年11月1日(土)午後1時30分～4時50分

場所：国立京都国際会館 メインホール(京都市左京区岩倉)

内容：総合司会 杉浦圭子さん(NHK大阪放送局アナウンサー)

◆古典の日宣言

田中翔子

第5回古典の日朗読コンテスト[京都府高等学校芸術文化連盟会長賞]

◆あいさつ

古典の日推進よびかけ人代表 千玄室(裏千家第15代・前家元、ユネスコ親善大使)

古典の日推進委員会会長 村田純一

◆祝辞 文化庁長官 青柳正規

◆連続講演「古典と私」



1. 「古典と私」千玄室

旧制中学時代に先生に薦められた「記紀」。『古事記』『日本書紀』からどのように日本が生まれてきたかを知り、800年前、鴨長明が隠棲を送った簡素でわびた風情のある“方丈庵”がまさに茶室の原点であること。そこで執筆された『方丈記』には、今日、日本を襲う自然災害に対しての警告が示されており、この世の中で何が役立つのかを教え導いてくれるものが古典の中にあるからこそ、今一度、古典を紐解き、その中から必要なものを取り出していくために、「古典の日」を中心に、古典を熟読し、古典が広がっていくことを願う、と結ばれました。

2. 「山本容子と姫君たち」 山本容子(銅版画家)

山本さんの絵はどのような発想から生まれてくるのでしょうか？本を読んで読書感想文を書いた思い出をみなさんお持ちかと思います。山本さんの場合は、読書感想絵。どんな読み物だったのか、一体その本から何を感じたのか、読み手の一人としてそれを絵に表現してこられました。『不思議の国アリス』に登場する自由闊達な少女にとりことなり、17年間描き続けた頃が丁度、源氏物語千年紀の年。日本の古典の中にもそんなアリスのような少女がいるのではないかと。そして日本の古典に触れ、平安時代に生きた、いきいきとした少女との出会いから「山本容子の姫君たち」が出来上がりました。絵の中には、物語には文字に書かれていない山本さんのウィットにとんだ想像が詰め込まれていたのです。

3. 「古典と現代文化」 青柳正規

古代ギリシャ・ローマ美術史研究の第一人者である青柳長官の「古典と現代文化」についてのお話です。工芸を中心に、それぞれの分野の人が憧れの対象とし、それに挑戦してみたいと思わせる、その対象としてきたものが古典ではないか。日本文化には、継承性、継続性があるが、それだけにとどまらず、海外からの文化の影響も柔軟に摂取しながら日本的なものをつくりあげ、継承させてきた。工芸作家にとって、古典という存在は目標にしたり、挑戦したいという模範であり典例の役割がある。しかし憧憬を単なる再現に終わらせるのではなく、それがつくられた精神を導入して自分のものとする喜び、また時代を超えての大きな流れを一緒に感じることでできたりする。それが広い意味での古典である、との考えを述べられました。



◆クラシック演奏

コダーイ: ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲より第1・3楽章

ヴァイオリン 玉井菜採 チェロ 上森祥平

20世紀のハンガリー出身の作曲家・コダーイが作曲した「ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲」。息の合ったお二人の演奏は、力強く透明感のある音色が心の奥底に響きました。



◆琳派400年記念対談「現代に生きる琳派」

高階秀爾(大原美術館館長、東京大学名誉教授)

芳賀徹(静岡県立美術館館長、東京大学名誉教授)

聞き手 杉浦圭子



2015年の琳派400年記念を先駆けて高階秀爾先生と芳賀徹先生に「現代に生きる琳派」をテーマにお話いただきました。琳派は、現代にどのように生きているのでしょうか。琳派の始祖と言われる宗達・光悦が生きた時代は、平安の古典を学ぶ公家や町衆、ブルジョワジーがいた古典復興の時代でした。古典の世界からモチーフ、画材をとった優れた美術が生まれました。歴史的な軸と社会的な軸が交わるところに、優れた才能、感覚、感性がプラスされて誕生したのが琳派です。日本人が創り出す作品は、そこにすべてを描き出すのではなく、文学的知識、教養等の形而上学がその内に込められ、それを見る者は、その美学を感じ取る感性を持ちあわせています。西洋との大きな違いは、西洋美学には作家の独創性が美学の基本にあるが、日本では日本の美学を受け継いでいくことが重要で、その文化の根は、今日までさまざまな大きな変動を潜り抜け、大切に受け継がれてきたのです。今に生きる作家が、前の世代に憧れ、それを自分のものとしてさらに発展していくことを期待すると締めくくられました。